

中世漆器の生産と流通について

広島県草戸千軒町遺跡の事例から

Production and Distribution of Middle-age Lacquerware:
Examples of the Hiroshima Prefecture's *Kusadosengencho* Ruins
YOTSUYANAGI Kasho

四柳嘉章

はじめに

中世漆器の生産と流通の問題については、考古学的には時代性や都市と地方、荘園や国衙領、港湾や山間部立地等、多様な地域性と政治権力との関係によって、さまざまな場面が想定される。これまで各地の事例を報告してきたが、比較検討できる遺跡や研究が限られている現状では、一般的な回答を出せる状況にはない。したがって確かなデータの集積こそが大切といえよう。本稿では質量ともに中世遺跡を代表する広島県福山市草戸千軒町遺跡（以下、草戸と略）出土漆器の事例から、漆器の生産と流通の問題について取り上げてみたいと思う。

草戸は13世紀中頃から14世紀前半期は鎌倉幕府の有力御家人長井氏のもとで、中継港湾都市としての機能を生かした商品流通が活発化、15世紀前半期在地領主渡邊氏の頃には、手工業者の分業化が進展し、定期市も発達したと思われ、生活必需品である食漆器はまさにその商品として重要な位置を占めていたと考えられる。

草戸出土漆器については、広島県立歴史博物館から2011年に『草戸千軒町遺跡漆器関係資料1—⁽¹⁾碗皿類の概要』（以下『草戸関係資料1』と略）、2017年に『草戸千軒町遺跡漆器関係資料2—⁽²⁾出土漆器等の科学分析と食漆器の諸問題』（以下『草戸関係資料2』と略）が刊行された。このことによって、初めて草戸漆器の全体像を共有できることになった。以下は両書から一部訂正・追加を含めて、表題に関係する事項を紹介したい。

I. 草戸千軒町遺跡の食漆器の全体像

漆器及び工具類の分類と科学分析は所有階層を推定するだけでなく、生産や流通を明らかにするねらいがある。草戸はそれにふさわしい遺跡であり、まず悉皆調査（1270点）によって得られた食漆器（碗皿類）の全体像を紹介したい（『草戸関係資料1』）。分類は、草戸千軒町遺跡調査研究所で行われてきたA類（内外面黒色漆）、B類（内面赤色外面黒漆）、C類（内外面赤色漆）に区分（各類詳細は以下）。時期区分は、Ⅰ期前半（13世紀中～後半）・後半（13世紀後半～14世紀初頭）、Ⅱ期前半（14世紀前半）・後半（14世紀中頃）、Ⅲ期（15世紀前半～中頃）、Ⅳ期前半（15世紀後半）・後半（15世紀末～16世紀初頭）、Ⅴ期前半（16世紀前半～17世紀中頃）・後半（17世紀後半～20世紀前半）とする。

草戸の盛行期は13世紀中～14世紀（1330年代）で、15世紀前半～中頃に激減している。樹種は全体を調査してしていないため傾向は不詳。

椀 A 類（内外面黒色漆，厳密には黒色顔料を含まないもの＝総黒色系漆，黒色顔料を含むもの＝総黒色漆の2種類あり，以下同）

I期前半（13世紀中～後半）では70%に赤色（朱・ベンガラ）漆絵の加飾があり，うち54%が型押漆絵。I期後半（13世紀後半～14世紀初頭）では64%に赤色漆絵の加飾。うち60%が型押漆絵。II期前半（14世紀前半）では67%に赤色漆絵。うち24%が型押漆絵。II期後半（14世紀中頃）では72%に赤色漆絵の加飾。うち3.4%が型押漆絵。III期（15世紀前半～中頃）では61.5%に赤色漆絵の加飾。うち型押漆絵は12.5%。IV期前半（15世紀後半）では69.5%に赤色漆絵の加飾。IV期後半（15世紀末～16世紀初頭）では38.7%に赤色漆絵の加飾。IV期では型押漆絵は見られない。型押漆絵は15世紀前半～中頃に激減し，15世紀後半までには消滅している。とくにIII期以降については，出土層位の再検討や伝世品も考慮する必要があるだろう。

椀 B 類（内面赤色外面黒色系漆および黒色漆）

I期でごく数点確認できるが，II期後半（14世紀中頃）に急増し，IV期ではA類を上回るようになった。漆絵（外面）はII期後半では69%，IV期では61%である。型押漆絵はIII期で例外的に1点の出土がある。

椀 C 類（内外面赤色漆＝総赤色漆）

IV期前半（15世紀後半）に登場し，後半（15世紀末～16世紀初頭）に継承される。型押漆絵は見られない。

椀皿の占有比率では，I・II期は椀3：皿1，III期は椀7：皿1，IV期では皿は更に減少，V期ではほとんどが椀となる。

皿 A 類

I期前半（13世紀中～後半）では67%に赤色（朱・ベンガラ）漆絵の加飾があり，うち25%が型押漆絵。I期後半（13世紀後半～14世紀初頭）では60%に赤色漆絵の加飾。うち44%が型押漆絵。II期前半（14世紀前半）では43%に赤色漆絵。うち11%が型押漆絵。II期後半（14世紀中頃）では66%に赤色漆絵の加飾。うち11%が型押漆絵。III期（15世紀前半～中頃）では赤色漆絵の加飾はなく，以後も若干みられるにすぎなくなる。

皿 B 類

I期後半に1点（漆絵あり）確認できるが，II期後半（14世紀中頃）に急増し，IV期ではA類を上回るようになった。漆絵（外面）はII期後半では38%，IV期では67%である。型押漆絵はIII期で例外的に1点が出土。II期後半に増加し，38%に漆絵がある。IV期前半には半減し，以後みられなくなる。

皿 C 類

Ⅳ期後半に若干確認できる。

Ⅱ．草戸千軒町遺跡の食漆器の時期別塗装工程と下地別分類

塗膜分析の結果から得られた塗装工程を時期と下地別に分類する（Ⅲ・Ⅳ期の渋下地は、Ⅰ・Ⅱ期とまったく同じであり割愛。30L00001 は 30 次調査，L は漆器，00001 は通し番号）。単に漆絵とあるのは手描き赤色漆絵のことである。

Ⅰ 期前半

漆下地

椀（総黒色漆，漆絵 30L00001，内外面平角に花卉（七宝）型押漆絵 36L00046）：内外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層

渋下地

椀（総黒色系漆，型押漆絵）：内面 ①炭粉渋下層 ②漆層 <34L00013>

Ⅰ 期後半

漆下地

皿（総黒色漆）：内面 ①地の粉漆下地層 ②漆層 ③黒色漆層 ④漆層 <45L00003>

渋下地

椀（総黒色系漆，七曜花卉型押漆絵）：内面 ①炭粉渋下層 ②漆層 <45L00010>

参考

板（総黒色漆，型押漆絵）：外面 ①地の粉漆下地層 ②漆層 ③炭粉漆層 ④漆層 ⑤地の粉漆層 ⑥漆層 ⑦地の粉漆層 ⑧混炭粉漆層 ⑨漆層 ⑩漆層 ⑪黒色漆層 <45L00008>

Ⅱ 期前半

漆下地

椀（総黒色漆，千鳥漆絵）：内外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 <37L00002>

椀（内朱外黒色系漆）：内面 ①地の粉漆下地層 ②漆層 ③漆層 ④赤色（朱）漆層 <29L00014>

皿（総黒色漆，漆絵）：内外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 ⑤漆層 <39L00018>

皿（総黒色漆，秋草漆絵）：内外面 ①漆層 ②漆層 ③黒色漆層 <39L00020>

渋下地

椀（総黒色系漆，菊花型押漆絵）：内面 ①炭粉渋下地層 ②漆層 ③朱漆絵層 <36L00042>

皿（総黒色系漆，千鳥型押漆絵）：内面 ①炭粉渋下地層 ②漆層 <39L00002>

Ⅱ期後半

漆下地

椀（内朱外黒色系漆）：内面 ①布着せ層 ②地の粉漆下地層 ③漆層 ④赤色（朱）漆層 ⑤赤色（朱）漆層 <27L00038>

椀（総黒色系漆，草花漆絵）：外面 ①地の粉漆下地層 ②漆層 ③漆層 ④漆層 <22L00007>

椀（総黒色漆，千鳥漆絵ほか）：外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 <24L00080, 27L00028, 27L00053, 27L00065, 36L00040, 36L00112, 37L00002, 42L00083>

椀（総黒色漆，散り蓮華漆絵）：内外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 <27L00006>

椀（総黒色漆，松葉笹漆絵）：内外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④黒色漆層 ⑤漆層 <27L00063> 外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 <12L00006>

椀（内朱外黒色漆）：内面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④赤色（朱）漆層 外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 <11L00016>

椀（内朱外黒色漆）：内面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 ⑤赤色（朱）漆層 <42L00084>

椀（内朱外黒色漆）：内面 ①布着せ層 ②地の粉漆下地層 ③黒色漆層 ④漆層 外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 <27L00045>

皿（総黒色漆）：内外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③黒色漆層 ④漆層 <24L00054>

皿（総色漆，竜胆・千鳥・松葉・松葉笹竹・草花漆絵）：内外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 <24L00016, 24L00090, 27L00032, 27L00035, 27L00064, 36L00205>

皿（総黒色漆，草花・松葉漆絵）：内外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 <27L00016, 36L00002>

皿（総黒色漆，松葉漆絵）：内外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 ⑤漆層 <39L00018>

皿（総黒色漆，秋草漆絵）：内面 ①漆層 ②漆層 ③黒色漆層 <39L00020>

皿（内朱外黒色漆）：内面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 ⑤赤色（朱）漆層 外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 ⑤漆層 <24L00045>

外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 <11L00016>

皿（内朱外黒色漆，松葉漆絵）：内面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④赤色（朱）漆層 外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 <28L00015>

渋下地

椀（総黒色系漆，内外面柳型押漆絵）：内外面 ①炭粉渋下地層 ②漆層 <43L00009>

皿（総黒色系漆，型押漆絵，漆絵）：内外面 ①炭粉渋下地層 ②漆層 <36L0036, 36L00202, 39L00013>

参考

折縁鉢（内朱外黒色漆）：外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 <27L00077>

特殊器形（総黒色系漆）：外面 ①炭粉渋下地層 ②漆層 <27L00117>

Ⅲ期

漆下地

椀（総黒色系漆）：内外面 ①地の粉漆下地 ②地の粉漆下地 ③地の粉漆下地 ④漆層 ⑤漆層
<27L00048>

椀（内朱外黒色漆，菊花型押漆絵）：外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 <11L00008>

参考

鉢（総朱漆，皆朱）：口縁部 ①布着せ層 ②地の粉漆下地層 ③黒色漆層 ④赤色（朱）漆層 <31L00027>

盤または鉢（内朱外総黒色系漆）：内面 ①地の粉漆下地層 ②漆層 ③漆層 ④赤色（朱）漆層

外面 ①地の粉漆下地層 ②漆層 ③漆層 ④漆層 <<36L00142>>

Ⅳ期前半

漆下地

椀（内朱外黒色漆）：外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 <12L00059>

椀（内朱外黒色漆，菊花漆絵，高台裏に朱漆による「竹田」銘）：内面（布着せ，詳細？）①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④赤色（朱）漆層 <32L00012>

椀（総朱漆，皆朱）：内外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③赤色（朱）漆層 <11L00046，12L00014>

椀（総朱漆，皆朱）：内外面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④漆層 ⑤赤色（朱）漆絵層
<12L00016>

椀（総朱漆，皆朱）：内外面 ①布着せ層 ②地の粉漆下地層 ③漆層 ④漆層 ⑤漆層 ⑥漆層 <27L00046>

皿（内朱外黒色漆，橘漆絵）：内面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④赤色（朱）漆層

外面 ①地の粉漆下地層 ②漆層 ③漆層 <11L00028>* 黒色漆層なし

参考◇

片口鉢（内朱外黒色系漆，注口部に布着せ）：内面 ①布着せ層 ②漆層 ③赤色（朱）漆層 <11L00031>

Ⅳ期後半

漆下地

椀ないし鉢（内朱外黒色漆）：内面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③漆層 ④赤色（朱）漆層
<15L00036>

椀（皆朱漆，端反椀）：内面 ①漆層 ②地の粉漆下地層 ③黒色漆層 ④漆層 ⑤赤色（朱）漆層
<31L00010>

椀（総黒色漆）：内面 ①地の粉漆下地層 ②黒色漆層 ③黒色漆層 ④漆層 ⑤漆層 ⑥漆層 <15L00016>

以上から草戸出土の食漆器には，上質品から普及品まで多様な塗装工程の存在が明らかとなった。安価な渋下地漆器の普及が知られるとともに，とくにⅡ期では椀 A・B・C 類，皿 A・B 類において，上質の漆下地占有率が高いことは草戸の特色である。生産地なのか，商品流通の拠点なのか，あるいは両方の性格を兼ね備えたものなのか等，集落の性格を探る上での重要な視点となる。食漆器の塗装工程や下地，中塗り漆（黒色漆），研ぎ等の技法は高度であり，砥石・漆容器（漆蓋

紙)、漆パレット(漆蓋紙)、漆篋、漆刷毛、漆濾布等の存在は、生産地であることを裏付ける。しかしながら、工具類の検討と塗膜分析結果から出土漆器のすべてが当遺跡で生産されたものではなく、搬入品(上質漆器)と在地生産品(普及漆器=渋下地漆器)に識別した。また碗皿類の荒型(ロクロ挽きする前に、全体を碗や皿形に荒く木取りしたもの)が1点しか確認できなかったことは、木地工房は調査区外に存在したことを示している。次にそうしたことを含めて草戸千軒町遺跡における、食漆器の特色とその生産における諸問題について取り上げたい。

Ⅲ. 草戸千軒町遺跡における漆工具からみた食漆器生産の問題点

中世の漆器生産は古代的な幾種類かの工房群が連動して操業する大規模な生産方式のほかに、分業化した小規模な生産方式と能登の合鹿碗のように木地師が渋下地から上塗りまでを行う方式がある。草戸からは食漆器の在地生産を裏付ける製品や漆工具が出土(図1)し、在地生産の典型例として取り上げられてきた。しかし草戸出土のすべての食漆器が、ここで生産されたと考えるには問題のあることが判明。以下、箇条書きに紹介する。⁽³⁾

- ① 碗皿類のロクロ(轆轤)挽き木地及びその未成品が出土しておらず、ロクロ挽き以前の荒型も1点しか確認されていない。このことから木地挽きは草戸以外(主に山間部)の地域で行われており、調査区内での轆轤師の居住はなかったと思われる。
- ② 漆篋では、上質品である漆地の粉用下地付け篋(篋先が薄く削りだされたもの)が見あたらない。とくに内面の角丸(アール、輪島塗では「折れ前」)に下地付けする際に、篋先と篋尻にかけて丸く成形し、地の粉を均一に塗りやすくする内篋(図2)がないのである。草戸では図1-9・10は外篋として使えるが、碗の内面(みこみ、折れ前～床部分)を塗ることはできない。鎌倉市佐助ヶ谷遺跡からは篋先が碗形状に丸くなったものが出土しており、このタイプが発達して図2の碗篋(内篋)になる可能性が高い。草戸出土の篋は木地がやや厚く、漆をこね合わせる「合わせ篋」が大半で、次の砥石と考えあわせると食漆器の上質品(地の粉漆下地)は草戸では生産していなかったと思われる。普及品の渋下地漆器製作の場合は、ミゴ刷毛(藁ミゴ)や毛刷毛で炭粉粒子をすりこむので、とくに専用の漆篋はいらない。地研ぎは木賊や炭等で行い、近世以降では砥石を使用している。
- ③ 砥石は地の粉漆下地や漆塗塗装面を薄く平滑に研ぎ出す道具である。研ぎは一般に次の塗り重ねを円滑にするためといわれているが、それだけでなく薄く研ぐことによって酸素の透過を良くし、内部の奥まで十分に固化を促進させる効用がある。加えて漆塗膜の欠点であるゴム質の孔を塞ぐことでもある。

古代の『延喜式』には伊予砥、青砥といった、中研ぎから仕上げ研ぎ用の砥石が記載されているが、草戸では大半が虫喰砥とよばれる対馬産の泥岩が使用されている。漆パレットに砥石が接着したまま出土した例があるが、これは漆パレットとともに捨てられたもので、形状から見て碗皿類の地研ぎに使われた証明にはならない。問題は碗皿(地の粉漆下地)の内面を研磨する、アールの付いた内砥石や床砥石(図2)に相当するものが、まったく見あたらない点である。棒状や三角状砥石(図1-14～18)は高台内面(糸底)を研ぐことはできるが、縦位にしる横位にしる幅が狭くて効率的ではない(棒状の幅の狭い砥石は縦位に使うと下地の凹凸に入りこんで平滑に研ぐことは

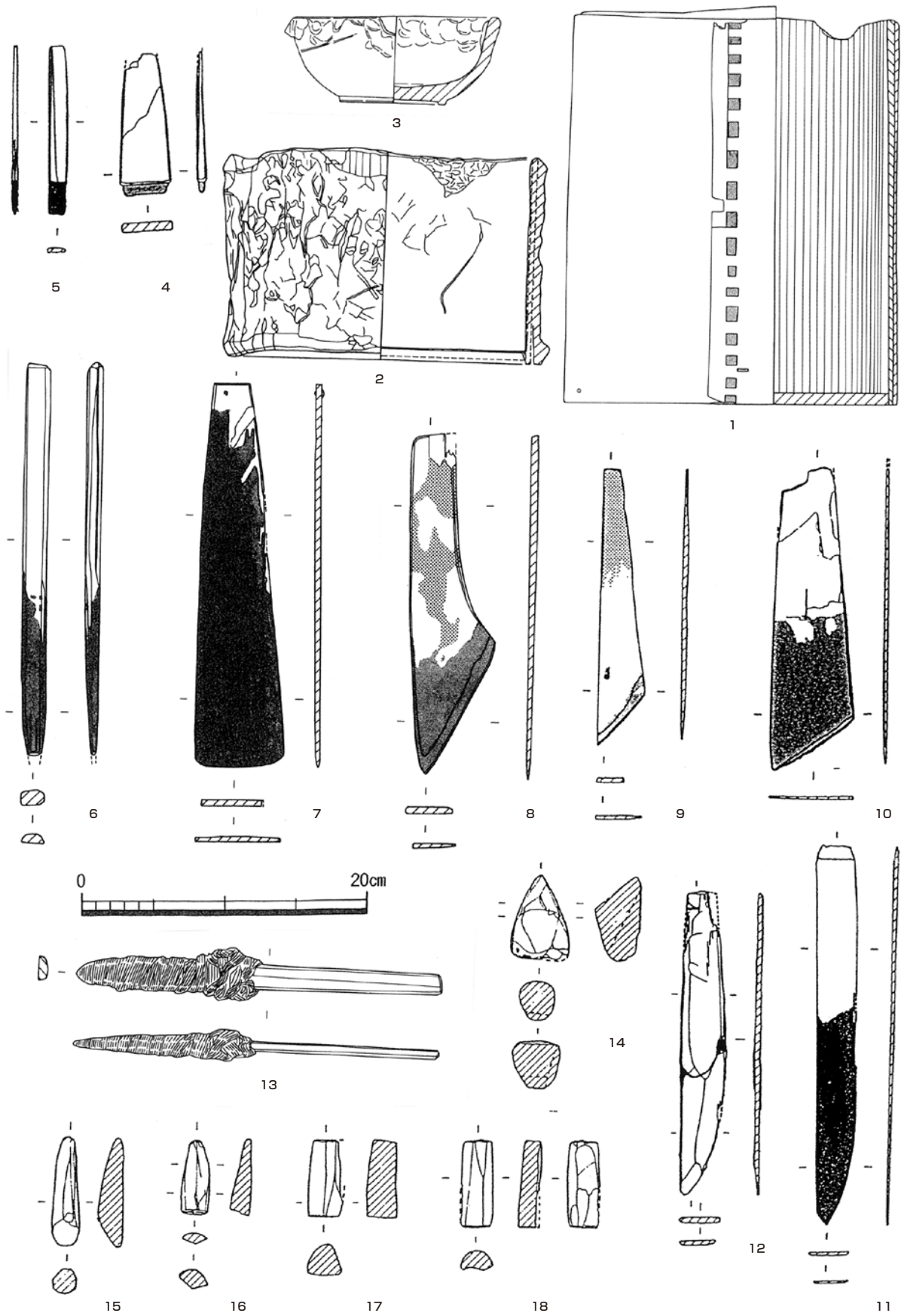


図1 草戸千軒町遺跡出土の漆工用具

漆容器(1・2) 漆パレット(3) 漆刷毛(4・5) 剣簞(6) 漆簞(7～12) 布巻き簞(13) 砥石(14～18)

できない)。

なお、科学的には未分析であるが漆や地の粉の付着があるといわれる砥石については、形状からみて碗皿の地の粉漆下地研ぎ用砥石(内砥石や床砥石)とは考えられず、別の器物の研ぎ用砥石の可能性を検討する必要があるだろう。いずれにしても砥石に付着した漆様膠着物の分析、付着鉱物粒子が漆下地用地の粉と一致するか否かの分析、砥石の詳細な形状分析を行った上で、碗篋(内篋)と合わせた総合的な議論が求められる。

以上から、現状では砥石の多くは刃物研磨が主体であり、碗皿類に関しては上質品の証左である地の粉漆下地研磨用が未確認である。

- ④ 漆刷毛は大小さまざまな形状のものがある(図1-4・5)。針葉樹(ヒノキ等)の柁目か板目の先端に切れ目を入れて、獣毛等を挟みこんだもので(古代には蓋を被せるものもある)、定型化されたものはない。形状は古代のように柄元が太いタイプは中世ではほとんどなく、板状が主流になり近世に継承される。なお、漆刷毛は使用後胡麻油等の不乾性油で洗う。渋下地用のミゴ刷毛(藁ミゴ)や毛刷毛は、膠着液そのものが柿渋なので今日まで残りにくい。

以上の諸点から上質品のA~C類、後述の型押漆絵漆器(地の粉漆下地・渋下地含む)は他産地から商品として搬入されたものと思われる。

IV. 初期漆絵と型押漆絵漆器の流通

漆絵が食漆器(碗皿類)に加飾されるようになるのは中世からで、その内外面に赤色漆絵による絵画的世界が導入されたことは画期的である。平安時代9世紀後~10世紀前半以降、朱漆器より下位に置かれた黒色漆器に、蒔絵や螺鈿等の意匠を簡略化して彩を加え、新しい時代のうねりを体现した器、これが中世の漆絵食漆器である。京都を中心に発達し各地に波及したと推測するが、漆工技術の地方伝播を含む中世前期の漆絵開始(12~13世紀)については、政権との関りが強いものとそうでないものがある。前者を鎌倉市内遺跡、後者では鳥取市下坂本清合遺跡例を紹介したい。

鎌倉における漆工技術は京都から塗師や蒔絵師等の工人移動によるものと考えている。とくに漆絵意匠・文様はだれが描いたかという点については、優れた意匠・文様は土佐派等の画工(絵師)が、蒔絵師や絵心のある塗師に提供していたと考えている。こうした相互扶助的な製作は、輪島を例に挙げれば作家誕生以前の昭和前期までは、普通に行われていた。

後者の例としては近年注目している鳥取市下坂本清合⁽⁵⁾遺跡。ここでは12世紀後半前後の漆碗皿が100点以上出土し、すべてが渋下地(樹種も主としてトチノキ等安価なものを使用)であり、初期漆絵が68.6%を占めていた。漆絵の文様はごく簡素でラフな菊花・撫子・萩・笹等の植物文と亀甲文で、塗師の手になるものとみて大過ない。国内出土の中世初期漆絵の大半はこうしたものである。

図版2・3は筆者が撮影した草戸出土の手描き漆絵の一部であるが、鎌倉時代のものは(図版3-16・17を除く)鎌倉市内遺跡出土例と意匠・文様・筆法がよく似ており、上質品(地の粉漆下地)が大半である。後述の型押漆絵とともに搬入された可能性が高いと考えられる。

さて、草戸出土食漆器を特色づける加飾の1つである型押漆絵は、その出土量においては鎌倉市内遺跡が他を圧倒しており、工具類からみても当地で製作されたと考えて大過ない。型押(陶磁器

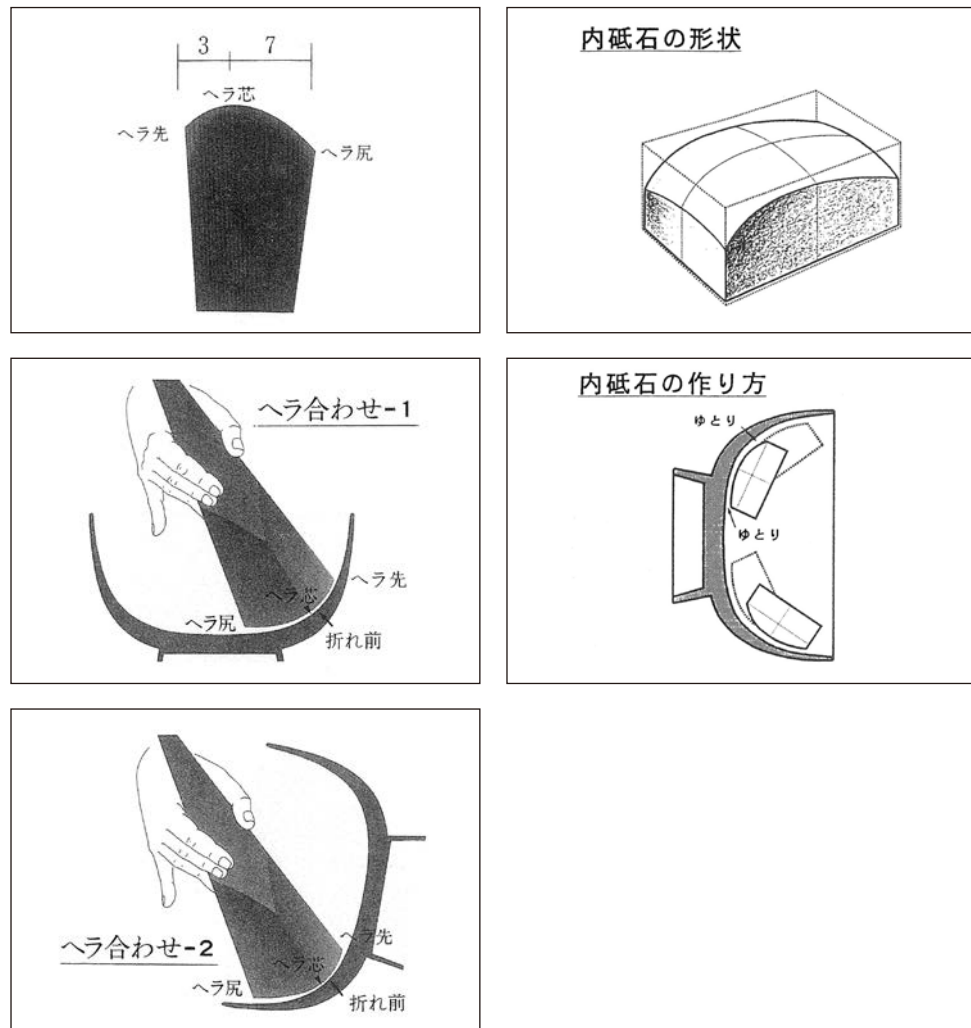


図2 碗篋・碗砥石
(原図：輪島漆器商工業協同組合)

でいうスタンプ) 漆絵は文字通り、文様を彫った型(原体)に朱漆を塗り、器体に押し付けたものである。原体はいまだ発見されていないが、重要無形文化財保持者の室瀬和美氏は、木型・和紙・皮型による実験の結果、皮型の牛皮・豚皮では表皮の組織が密で漆をはじいてしまう問題が生じ、⁽⁶⁾適度に漆を吸い込む鹿皮が最適とされている。ほかに切り込みの鋭い型押部分もあることから、洪紙も捨てがたいと考えている。

型押漆絵漆器は北条得宗家等鎌倉と深いつながりのある所で出土しており、すぐれて政治的な側面を持った漆器といえる。その主な分布は北海道余市町大川遺跡から、太平洋側では宮城県松島町瑞巖寺境内遺跡、西は京都市内遺跡、広島県福山市草戸千軒町遺跡、福岡県太宰府市観世音寺南門前面地域、日本海側の福井県以北では福井県あわら市桑原遺跡、石川県加賀市佐々木アサバタケ遺跡、同金沢市堅田B遺跡、新潟県柏崎市琵琶島城跡、山形県東根市小田島城跡等の拠点的遺跡か

ら出土している。

多量の漆器が出土した神奈川県鎌倉市佐助ヶ谷遺跡例から、型押漆絵⁽⁷⁾（13世紀後半～14世紀に盛行）の特徴を見てみたい。出土漆器（碗皿類）の約70%に漆絵の加飾があり、型押漆絵は主に植物文、動物文、構成文からなる。植物文は菊・撫子・梅・桜・柏・萩・楓・桐・竹・菖蒲・葵・松、動物文は鶴・千鳥、構成文は蛇の目、巴、亀甲等で、これらが単独ないしはほかの型押文、手描き文と組み合って、さまざまな文様構成がみられる。どの文様も生命力豊かな吉祥文や宗教的な意味合いを備えたもの、あるいは秋の情景に欠かせない秋草文等からなる。型彫り自体が実に緻密であり、型押後の細部表現には引掻技法^{ひっかき}（針搔、針先状工具による細部表現）が用いられている。

型押漆絵漆器の炭粉下地層からは柿渋の赤外線吸収スペクトルがえられた（渋下地）。その上の塗りも漆1層程度の相当簡略化された工程で、ここでは型押漆絵と塗装工程の簡略化、樹種は普及品に対応した選択と考えられる。とはいえ渋下地であっても型押漆絵の赤色顔料は、安価なベンガラではなく高価な朱を用い、見た目の華やかさを演出している。型押漆絵は蒔絵や螺鈿、和鏡等の意匠（文様）を簡略化したことは、伝世品と比較すれば容易に理解できるが、メリットは加飾において金銀粉がいらず、下絵描きや金銀粉を炭で研ぎ出す手間もかからない。木地もケヤキ以外の安価なものを用いることが多い。塗装工程も下地は漆ではなく、柿渋に炭粉粒子を混ぜた安価な渋下地、漆塗りも1回程度の簡略化されたものである。明らかに注文一品生産から、不特定多数にむけた量産化を意図した技法と考えられる。⁽⁸⁾

だが草戸から例外が検出された。草戸出土の型押漆絵漆器はⅠ期後半（13世紀後半～14世紀初頭）からⅡ期後半（14世紀後半）において、上質品である地の粉漆下地漆器が検出されたのである。このことから型押漆絵漆器にもいくつかのランク差のあることが確認できた。型押漆絵文様（木瓜・巴・桐・千鳥・亀甲・平角・草花文等）も、鎌倉市内遺跡と共通する文様が多い（図版2・3、これは出土品の一部）。前述の通り工具類の検討（別項参照）から、草戸では地の粉漆下地漆器をはじめとする型押漆絵漆器は生産されていなかったと考えており、搬入品である可能性が高まったといえよう。

そして型押漆絵漆器及び手描き漆絵漆器搬入の背景として留意しておきたいのは、鎌倉幕府の有力御家人長井氏の他に、遺跡の西側山裾に位置する明王院である。明王院は17世紀中ごろまでは常福寺とよばれ、西大寺流律宗であった。この律宗は北条氏と結びついて、その勢力拡大とともに各地の要衝に展開した。⁽⁹⁾ 鎌倉特産品の手土産として、型押や手描き漆絵漆器が、草戸（草出）の地に運ばれた必然性は大きいと考えている。

V. 黒色漆使用の漆器も流通品

草戸出土の食漆器のなかには、中塗りや下塗りに黒色漆（油煙による黒色顔料を混ぜた漆）を用いた上質品がかなり含まれている。この黒色漆（油煙、掃墨）を塗ること自体が、古代では上質品の定番であり、『延喜式』（905～927年、内匠寮、大炊寮、大膳職、内膳司）には材料が詳細に記載されている。この技法は中世においても継承されており、食漆器の品質や流通を考える際の重要事項といえる。

『東寺百合文書』『光明講折敷修理』（う函13-1、1457年）では、碗折敷等の修理（垵甘膳 折

敷廿枚 其外) のための購入代金が記載されている。⁽¹⁰⁾ この「光明講折敷修理」では「掃墨 (五文)」があげられており、ほかの項目からも皆朱の上質品とみていい。黒色漆を使用した中世塗膜分析例としては筆者が報告した福井県家久遺跡の礫槨墓 (13 世紀前～中葉) 副葬品の化粧箱と硯箱がある。⁽¹¹⁾ 白磁四耳壺、太刀、短刀、烏帽子、京都系中世土師器、硯箱と内容物一式、化粧箱と内容物一式等豊富な遺物を副葬品しており、中央と極めて密接な関係を有した有力荘官クラスの所持品。この化粧箱の塗装工程は、地の粉漆下地の上に黒色漆 (油煙)、さらに 3～4 層の透漆が施されていた。硯箱の下地は炭粉漆下地であった。つまり同じ箱とはいえ、化粧箱の方が上質技法による製作であることが判明している。

埼玉県広木上宿遺跡 (13～14 世紀) の浅い土坑 (楕円形、長径 0.9m、短径 0.7m) からは、ミニチュアの多宝塔 (高さ 3.5cm 前後) と未開敷蓮華 (蕾を付けた蓮茎、長さ 3.5mm 前後) を納めた漆塗り手箱 (以下手箱と略) が出土した。⁽¹²⁾ 手箱の大きさは平面で長辺 40cm、短辺 18 cm (器高不明) の合口造 (印籠蓋造) と考えられ、X 線透視によって部分的に布着せが確認されている。塗装工程は地の粉漆下地の上に黒色漆層 (油煙による黒色顔料を含む層)、さらに 4 層の透漆が塗られていた。

このように中塗りに黒色漆を用いる技法は古代以来の上質漆器の技法であるが、中世においても継承されたことがわかる。草戸では食漆器においても、地の粉漆下地と油煙による黒色漆を施した例が相当数確認することができたことは大きな成果といえる (「Ⅲ. 草戸千軒町遺跡の食漆器の時期別塗装工程と下地別分類」参照)。草戸では上質品は生産していないと考えられるので、この点も流通品の目安になる。今後は微量分析による下地鉱物の産地比定の研究が鍵を握ることになろう。

終わりに

1985 年に広島県草戸千軒町遺跡調査研究所と広島県考古学研究会は、漆器研究の重要性を取り上げた『中世遺跡出土の漆器』⁽¹³⁾ という学史に残る研究集会を開催。これを機に各地で漆器の存在が注目され、多様な漆器の世界が浮かび上がってきた。牽引役としての草戸の存在は大きなものがあったといえる。その後、草戸出土漆器の全体像が不詳のまま何十年と経過し、漆器の劣化も進行的ことから、広島県立歴史博物館と筆者が主宰する漆器文化財科学研究所との共同研究を 2003 年 (平成 15) から開始し、冒頭の 2 冊の『草戸千軒町遺跡漆器関係資料』が刊行された。

今回はそのなかから食漆器の生産と流通の問題について、考古学的な悉皆調査と科学分析の定量的なデータから、現状で考えられることを紹介してきた。京都市内遺跡との比較検討も必要であるが、同様の方法で調査した事例がないことから、恣意的なものになっては結論を誤る恐れもあるので、今回は差し控えることにした。

なお、本稿をまとめるに際しては、広島県立歴史博物館並びに草戸千軒町遺跡調査研究所関係者である篠原芳英・下津間康夫・鈴木康之・平川孝志・尾崎光伸氏、鎌倉市教育委員会玉林美男・伊丹まどか氏、国立歴史民俗博物館工藤雄一郎氏をはじめとする皆さんに大変お世話になった。厚く御礼申し上げる。

註

- (1)——『草戸千軒町遺跡漆器関係資料1—碗皿類の概要』広島県立歴史博物館, 2011
- (2)——『草戸千軒町遺跡漆器関係資料2—出土漆器等の科学分析と食漆器の諸問題—』広島県立歴史博物館 2017
- (3)——四柳嘉章「草戸千軒町遺跡出土漆器等の科学分析と食漆器の諸問題」『草戸千軒町遺跡漆器関係資料2—出土漆器等の科学分析と食漆器の諸問題—』広島県立歴史博物館, 2017
- (4)——渡邊素舟『平安時代国民工芸の研究』東京堂, 1943
- (5)——家塚英詞「総括」『下坂本清合遺跡Ⅱ』第2分冊【本文編2】鳥取県教育委員会, 2017
- 竹原弘展・藤根 久・米田恭子・小林克也(パレオ・ラボ)「塗膜分析」『下坂本清合遺跡Ⅱ』第2分冊【本文編2】鳥取県教育委員会, 2017
- (6)——室瀬和美「中世における漆工文化の変容と保存修復」『文化遺産の世界』第13号, 国際航業文化財事業部, 2004
- (7)——斉木秀雄ほか『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団 1993
- 伊丹まどか「碗, 皿における漆絵の文様集成」『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団, 1993
- (8)——四柳嘉章「佐助ヶ谷遺跡出土漆器の塗膜分析—第1次報告—」『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団, 1993
- (9)——岩本正二『草戸千軒町』吉備人出版, 2000
- (10)——渡邊太祐「中世における漆器製作工程の復元」『日本歴史』吉川弘文館, 2015・2月号
- (11)——四柳嘉章「考古資料の修復と文化財科学—福井県家久遺跡・礪波墓出土漆器の事例から—」『國學院大學博物館学紀要』第二七輯 國學院大學博物館学研究室, 2003
- (12)——四柳嘉章「埼玉県広木上宿遺跡出土漆箱の科学的分析」『広木上宿遺跡—古代・中世編』埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1996
- (13)——『第5回中世遺跡研究集会 中世遺跡出土の漆器』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所・広島考古学会, 1985

その他の引用・参考文献

- 四柳嘉章 『漆Ⅰ・Ⅱ』法政大学出版局, 2006
- 四柳嘉章 『漆の文化史』岩波書店, 2009
- * 図版1～3は筆者が撮影し『草戸千軒町遺跡漆器関係資料2—出土漆器等の科学分析と食漆器の諸問題—』に掲載。図1・2も同書よりの転載である。

(石川県輪島漆芸美術館, 国立歴史民俗博物館共同研究員)
(2019年5月28日受付, 2019年10月7日審査終了)



1



2



3



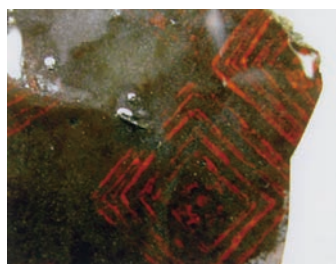
4



5



6



7



8



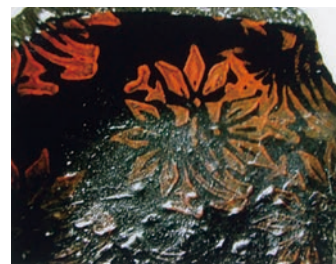
9



10



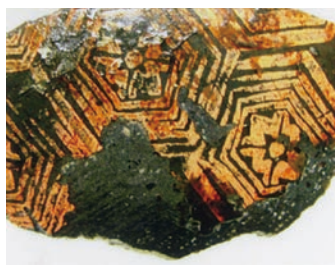
11



12



13

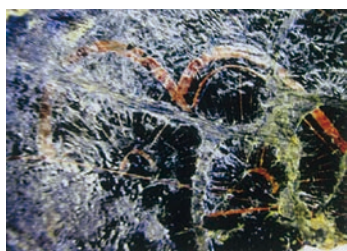


14

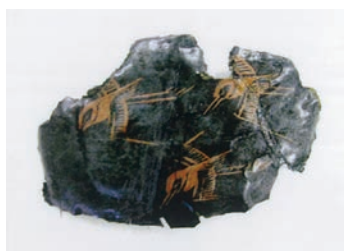


15

図版 1 型押漆絵文様



1



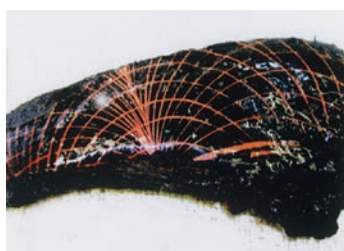
2



3



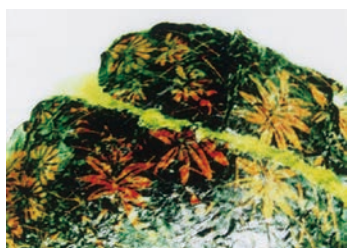
4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18

図版 2 漆絵文様 1



1



2



3



4



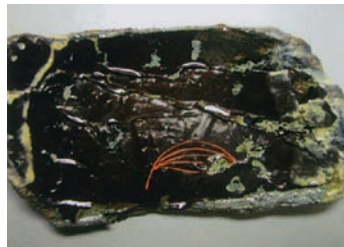
5



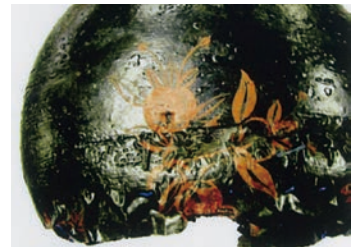
6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18

図版 3 漆絵文様 2